東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

Professor KAGAMI Masahiro’s Memories (Special Issue Commemorating the Retirement of Professor KAGAMI Masahiro)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2022-04-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173797

学芸地理 77 号 2021 年 pp.20-29

加賀美雅弘先生の思い出

等身大の好奇心のかたまり 加賀美先生

1996 年修了（院 28 期） 中川（岩垂）雅子

私立大法学部を卒業後，学芸大学大学院の修士課程で地理学教室にお世話になった私が加賀美研究室の扉を叩いたのは，修士2年の春のことだった．自分の修士論文のテーマとして，東京における在日コリアンの集住に取り組むことを決め，エスニック集団研究の勉強を進めるなかで，気が付いたら加賀美研究室に出入りするようになっていた．加賀美研究室の書棚から，都市社会地理学，エスニシティ研究，都市生態学などさまざまな分野の本をお借りしたり，ヨーロッパをフィールドとする加賀美先生から，授業の空き時間にヨーロッパのエスニシティ研究の動向やご自身のドイツ留学時代のこと，ヨーロッパ巡検での見聞など貴重なお話を伺った．院生生活の多くの時間を加賀美研究室で過ごすうちに，研究室に縁のある人なら誰しもが懐かしく思い浮かべるだろうワインを入れる木箱（文献書類の整理箱として活用されていた）や，多岐にわたる食やお酒に関する興味深い蔵書に囲まれながら，小ぶりなタイ航空の機内用ワイングラスに注がれたワインを片手に，加賀美先生の熱弁に耳を傾ける常連の一人となっていた．

その後，私の修論の研究は暗礁に乗り上げ，研究テーマを方向転換したのち，修士課程を3年かけて修了した．博士課程に進学したのち念願のドイツ留学を果たし，帰国後は高校の教壇で地理を教える身となり20年余り経つ．加賀美先生のエスニシティ研究の薫陶を受け，今でもエスニシティへの関心が冷めやらず，地理の授業で「人種・民族問題」に関する学習単元では教材の記述に飽き足らず，時間が許すかぎり時間を割いて掘り下げることにしている．その他，（私事ながら）先生の縁結びで人生の伴侶となる地理研究者とも出会い，先生が主催される好奇心旺盛な人たちの集まりにも寄せて頂くなど，先生との交流は公私にわたり続いている．

食いしん坊や呑兵衛の集まる加賀美ゼミは，気さくな加賀美先生を囲んでいつも笑いが絶えない研究室だった．学者然として教壇に立つ姿や学会発表される加賀美先生の佇まいも素敵だが（“地理学教室の吉田栄作”でしたよね♪），ご自宅にゼミ生や外国人研究者のご友人が大勢押しかけて賑やかに呑み食いしたり，国分寺駅商店街の中華店で財布忘れたことに気づかず無銭飲食しちゃったり（後日きちんとお支払いしました！），教科書会社の研修旅行では，モロッコの道端で売られていたサボテンの実を食して一緒にお腹を下したり，とお付き合いよろしく，いつも等身大でチャーミングな加賀美先生．そんな加賀美先生が歳を重ねられ，退職の時を迎えられることは誰もが信じがたいが，好奇心旺盛な加賀美先生物語のシーズン2の始まりに期待したい．

2005年3月　ブダペスト巡検にて

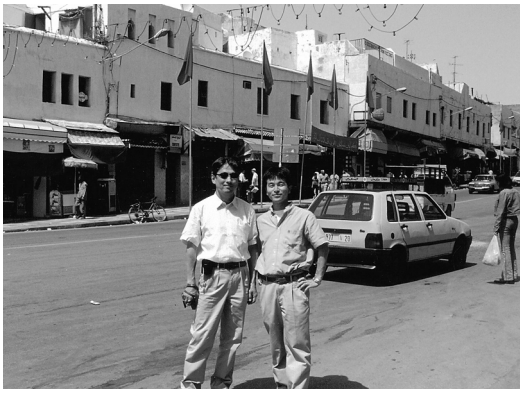
加賀美先生との巡検で「景観を読む」

1994年卒業（学部42期）　中田雅之

「レンタカーで約1か月にわたりドイツ国境地帯をまわりました．旧東ドイツの変化が激しく資本主義化する一方で，土地利用や景観など東西間の違いが明瞭で地理的興味が尽きません．調査がんばってください.」これは，私が野外研究に悩む3年の夏，加賀美先生がドイツから送ってくれた絵ハガキ（フライブルクの写真）に記された内容です．米ソ冷戦後の変化を肌で感じている地理学者の文面は今も私の宝物です．

私は，加賀美先生の社会地理ゼミ（現ヨーロッパ地誌ゼミ）が創設された頃に在学していました．『気象で読む身体』（講談社現代新書）の執筆，「野外見聞会」の主宰など地理学の最前線を歩む先生のゼミでは，時折スライド上映会が開催され，先生の蘊蓄に耳を傾けることがゼミ員の楽しみでした．「下町巡検（亀戸天神など)」，「山梨巡検（信玄堤など)」などの巡検では，現地の景観を読み解く先生のガイドで知見を深め，終了後にワインと共に語り合うのがお決まりでした．あの当時，「ぶっちゃけ」で始まる先生のトークが印象的で，これ程までに地理的事象の造詣に深い人物が身近に存在することに感心し，知的好奇心が刺激された日々が懐かしいです．いつかあの頃のゼミ員たちで集いたいものです．

先生との再会は，2003年の地理研修旅行「ジブラルタル海峡を渡って初めてわかるアフリカとヨーロッパ」であり，先生がガイドを務める10日間の行程でした．全国の地理教員だけが参加するこの旅において，フランス資本の影響を受けたワイナリーについての大学講義さながらの専門的な解説，タンジール港の出国審査での語学力等は参加者の度肝を抜きました．そんな中，授業で活用する写真撮影のためにフィルムカメラを構える私に，フェズ（モロッコの迷路都市）を訪れた際，先生から「実際の人々の生活を切り取る写真が撮れるといいね.」とのアドバイスを頂きました．それはまさに，景観写真で地域の特徴を読み解くこと，地域的多様性や多様な文化の共存を考察できる写真を撮影するためのご指導でありました．その後の道中，先生の後ろで同じようなアングルの写真を撮影することになるのは言うまでもありません．最終日の夜，リスボンのバーでファド（民謡）を聴きながら，サングリア酒と共に先生と語り合ったのが昨日のことのように思い出されます．



2003年8月　モロッコにて

加賀美先生，長い間お疲れ様でした．先生にご指導いただいたことを，本当に感謝しております．改めてお礼を申し上げます．私は先生から学んだ景観を読み解く経験を，高校生に伝えようと日々の授業に臨んでいます．今後の先生の益々のご活躍とご健康を祈念いたします．

加賀美先生との思い出

1996年卒業（学部44期）　小河（柳内）美和子

「中学で大好きだった地理を大学では勉強してみたい！」と意気揚々とA類社会科に入学した私でした．実は私の出身高校では地理の授業がなく，つまり，高校では地理を勉強しておらず，日本史入試を経て地理学教室の門を叩く

という少し変わった学生でした．そんな私ですから，高校で地理を勉強していない分を取り戻すべく，1年からゼミに参加しようと思い，なぜか入ったのが，加賀美先生の社会地理ゼミでした．「英語よりドイツ語の方が話しやすい．」と，初めてのドイツ語に悪戦苦闘している私には信じられないことをおっしゃったり，「ここのウィンナーがおいしい．」とウィンナーの専門店（小金井のケーニッヒ）を教えてくださったりと，日本から出たことのない私には「異文化！」と思わずにはいられないゼミでした．

ゼミでは，文献を発表しあったり，4年生の卒論の概要を聞いたりといった勉強もしましたが，何といっても，研究室での飲み会や巡検が思い出されます．ワインの瓶が並ぶ中，先生がニコニコしながら，岩垂雅子さんや能美淳子さんたちと語り合っている様子は，今でも頭の中によみがえります．先生のお宅にお邪魔し，かわいい赤ちゃんだったお嬢さんを抱っこしたのも懐かしい思い出です．ゼミ合宿の写真が見つかりました．なぜか大笑いしている私を今眺めると，「楽しかったのだろう．」と思わずにはいられません．山梨の大善寺に泊まったとき，お坊さんがワインの一升瓶を持って出てきたのも驚きでした．4年間のゼミでは，地理学だけに留まらず，さまざまなことを吸収できたように思います．

卒業後，小学校教員となりましたが，ここ数年は，先生が個人的に開催されている「野外見聞会」という会に参加させていただいて，大人の社会科見学・勉強会を楽しんでいます．また，4年前には教員免許講習を学芸大で取り，約20年ぶりに先生の講義を受けることもできました．さらには，息子が現在学芸大に在籍しており，先生の授業を受講したようです．長きにわたり，家族ぐるみのお付き合いとなり，うれしい限りです．今まで本当にありがとうございました．

1996年3月　卒業のゼミ仲間（地理学教室にて）．
左から大石太郎さん，加賀美先生，右から能美淳子さん，小河

加賀美先生は，これからもフィールドを飛び回り，まだまだ研究を続けられることでしょう．今後ともよろしくご指導をお願いします．

加賀美先生との思い出

2003年卒業　2006年修了　藤原（江尻）直子

「ドイツの地誌がやりたい！」と思って欧米研究を選んだ私だったが，まだインターネットも今ほど普及していない時代（90年代の終り），どんな先生がいてどのような研究／授業をしているのかなど，ろくに知りもせず入学した．

しかし，今思えば，自分の選択は誤っていなかったことを誇りにさえ思う．むしろその自信だけでその後の人生を歩んできたといっても過言ではない．それほど，学芸大で加賀美先生に出会えたことは大きなインパクトだったのだ．

2年前期に初めて先生の授業を受けることになり（「欧米の地理特論」），ヨーロッパへの造詣が深い先生のフィルターを通して語られる内容は私の知的好奇心を刺激した．それから私が社会地理ゼミ（現ヨーロッパ地誌ゼミ）の門を叩くまで，それほど時間はかからなかった．ゼミではK類だけでなく地理学の学生とも議論を

交わすことができるのは新鮮だったし，院生を含む個性の豊かな（＝強烈な）メンバーによる議論にもまれたことが，その後の成長につながったと思う．

ゼミを通して「巡検大好き学生」になった私は，4年の7月に急遽念願のドイツ・ハイデルベルク大学への留学が決まった．その際には加賀美先生がかつて留学・研究滞在をされた同大学のモイスブルガー教授を紹介していただいた．私はこのご縁のおかげで，1年間に行われた人文地理系のドイツ国内外の巡検に4回（約20泊分）参加したり，研究助手のアルバイトもさせてもらったりと，何かと相談しやすい環境に恵まれて普通ではなしえない経験に満ちた留学生活を送ることができた．

結果的に学部5年，修士課程2年と長らく在籍していたおかげで，自然と指導をいただく機会は多くなった．渡独によって現地で自ら見て感じたことが増えるに従い，私の興味は一部マニアックな面が見え隠れし始めるのだが，そのような酔狂な話にも先生は共感をもって理解を示してくださった（と少なくとも私にはそう感じられた）のはありがたかった．のみならず，最終的にはそれが修論指導へと繋がるわけで，「巡検大好き，でも書くのはめっぽう苦手」な私がなんとか修論をまとめられたことは，先生のご指導の賜物であり，また私が大学の研究から離れた後もその定点観測的な後日談を論文としてまとめて下さったことは，いまだに恐悦至極である．

2006年3月　ベルリン巡検にて

この度，定年退職のお知らせの際，先生ご自身が「自覚のない定年」と書かれていたのが先生らしく，文章を読みながら思わず笑みがこぼれた．あの頃も今も変わらず，先生ご自身がやりたいことを全力で楽しんでおられることには，いよいよ尊敬の念が深まる．今後もまだまだご活躍されることを祈念しております．

初めてのヨーロッパ，初めてのオープンカー

2011年修了（院43期）　蛭田哲平

ハイデルベルク――かつて加賀美先生が過ごしたドイツの大学都市．そんな思い出の地で先生と合流し，先生の当時の足跡を辿りながら歴史ある街を案内してもらう．夜は先生の旧知の仲，ハイデルベルク大学のモイスブルガー先生と夕食を共に．ドイツ語を流暢に操り，楽しそうに話す先生を見て，尊敬の念を覚えるとともに，日本にいる時よりも遥かに生き生きとした姿が印象に残っている．

日が変わり，鉄路でドイツの東部へ．資料収集のためライプツィヒで数日過ごし，その後，車を借りてウィーンまでの約600kmの旅が始まった．先生が借りた車がなぜかオープンカーだったことも忘れられない思い出だ．道中，ヨーロッパ地域ゼミの先輩にあたる江尻さんと落ち合い，彼女の修士論文の研究対象地域デベルンにて，散策しながら研究内容を教えてもらった．それからふらっと立ち寄ったドレスデン近郊の小さな街ピルナで1泊．ちょうど秋の収穫祭で賑わい，ここでフェダーヴァイサーを先生から教わった．この時期にしか楽しめないワインになる前の微発泡の葡萄酒だ．これが罪深いお酒で，口当たりがよく，三人でへべれけ

になったことはご想像の通り．翌日，隣国チェコに入ったところで江尻さんと別れ，先生の運転で一気にオーストリアまで走り，長閑な村でもう1泊．村の名前を思い出せないが，たらふく飲んで翌日二人して二日酔いになったことは今でも鮮明に覚えている．ここではシュナプス（蒸留酒）を教わり，特に洋梨のシュナプスが格別の味だった．ライプツィヒを出発してから2日半ほどかけてウィーンに到着．ウィーンの中心市街地の豪華絢爛な景観に圧倒される一方で，先生が研究されているロマが多く住む地域の雰囲気にはまた別の意味で圧倒された．ヨーロッパの都市はコントラストが興味深い，そんなことを強く感じながら，ウィーンで先生と別れた．この話は，加賀美先生と出会って半年も経たない2008年9月に，先生と10日間ヨーロッパに滞在したときのこと．大学院から東京学芸大学に入った私を，ヨーロッパの虜にしたのは紛れもなくこの旅だった．

先生との思い出を文章に起こすと，お酒の話が目立ってしまうが，この旅の中で，ヨーロッパ地誌，先生の研究の関心事，私の研究などについて，ここには書ききれないほど多くの示唆に富んだ話を聞かせてもらった．先生と10日間を共にする機会はこれ以降なかったし，この先もおそらくないだろう．この貴重な機会を十分に活かせたかと聞かれると自信はないが，その後，私自身もハイデルベルク大学に1年間留学し，その間ライプツィヒに足繁く通い，修士論文をまとめることができたのはこの旅が出発点だったと言える．

社会主義時代を経験した都市の雰囲気．駅近くの中心市街地には荘厳な建物が建ち並ぶ．中心市街地から少し離れると空き家や落書きが目立ち，郊外にはプラッテンバウ（社会主義時代に建てられた団地）．初めて見たライプツィヒでの光景が頭から離れず，この都市が東西ドイツ統一後にどのように変化しているのかを明らかにしたく，研究を進めた日々が懐かしく思い出される．

末筆ではございますが，加賀美先生は多くの知識と刺激を惜しみなく与えてくれました．また，修了してからも気にかけてくださり，大変感謝しております．退職を迎えられて寂しく感じますが，今後も益々ご活躍されることと信じております．長きに渡り，大変お疲れ様でした．また，ヨーロッパを一緒に旅する機会があることを切に願っています．

地理と「出会わせて」くださった恩師

2008年卒業　2010年修了　山本葉月

加賀美先生，御定年おめでとうございます．「地理」の学生・院生ではなかった私がこの場で筆をとらせていただくのは甚だ恐縮なのですが，どなたにも負けず劣らぬと自負する加賀美先生への感謝を込めて書かせていただきます．

研究室でのゼミ活動を意識し始めた学部2年の秋，私は先生から「第2回ヨーロッパ巡検」へのお誘いを頂きました．それまでの興味は欧州史に向いており，地理に対しては大変失礼ながら特別な関心を寄せていた訳ではなかった私に何故声をかけてくださったのか，今でも不思議です（何となく怖くて聞けていません！）．ともあれ，その巡検への参加が私を当時想像もしていなかった道へと導いてくれることになったのです．

初めて訪れた欧州で出会ったのは，「景観として現在に生きる歴史」でした．特に，自由時間で先生と御一緒させていただいた際に訪れたベルリンのGendarmenmarktでの衝撃が忘れられません．現代的な街並みの中に突如として現れた17世紀の教会建築，そして先生の一言が私の人生を，地理を学び大学院へ進学する道へと導いてくださいました．自分の発言につい

2008年3月　ブダペストの居酒屋にて

ては曖昧ですが，恐らく自分にとって「面白い」と感じるのはこれ，といったことを必死にお伝えしたのだと思います．そんな拙い主張を穏やかに聞き入れてくださり，先生がくださったのは「それも地理なんだよ」というとてもシンプルで，でもそれ故に心に残るお言葉でした．そこで私は，自分が真に学びたいと思っていたことが何かを自覚し，それを深められる学問として地理に「出会った」のです．旅の後半にはすっかり都市の歴史的景観にのめりこみ，中世の街並みが残るクラクフの見学時間をもっと，もっとと欲する私に「山本さんにはもっと見せる時間をあげたかった」と言っていただきました．先生に認めていただいた気持ちになり，子供のような誇らしさと嬉しさを感じたことを今でも覚えています．

その後，先生が主催される「ヨーロッパ巡検」には2006年から2008年まで3回連続で参加させていただき，それ以外にも研究のため訪れたウィーンで御指導を頂いたこともありました．もちろん，先生の研究室など学内で御指導を頂いたことも数知れず，割いていただいた貴重なお時間は数え切れず……といった6年間だったのですが，やはり私は，ヨーロッパでご一緒させていただいた際の加賀美先生のお姿が強く印象に残っています．メモを取る手が追い付かないほどの知識を伝えてくださるところ，知識だけではなく経験に基づくお話も惜しまず共有してくださるところ，そして楽しむときには我々学生と一緒に楽しんでくださる（と私は感じていました）ところ……．ここで具体的に取り上げたい思い出は尽きません．そんな先生のことが私は大好きですし，心から尊敬しています．ですので，社会人になってからも先生の「授業」を受けられたこと，本当に嬉しかったです．欧州地誌への愛を再確認させていただきました！

今後も形は違えども学芸大にて教鞭をとっていただけるとのこと，心より嬉しく思っております．見聞会等でも引き続きお世話になれたら嬉しいです．先生の御関心はそのまま私にとっての興味関心ですので，是非またお話を聞かせてください．そして，可能ならばまた欧州巡検でご一緒したいです！私も先生のような，地理の楽しさを伝えられる人間になりたいと僭越ながらいつも考えておりますので，今後とも御指導よろしくお願いいたします．

末筆ながら，心より敬愛する恩師，加賀美先生への言葉に尽くせぬ感謝をこめてお祝いの言葉とさせていただきます．

加賀美先生のご定年に寄せて

2015年卒業　市（西山）　萌

この度，加賀美先生がめでたくご定年を迎えられるとのことで，私の個人的な思い出話で恐縮ですが，2011年に欧米研究へ入学してからのことを，いくつか記してみたいと思います．

加賀美先生に初めてご指導いただいたのは，欧米研究必修の「欧米の地誌入門」で，私はこの授業で初めて地理学というものを知ることになりました．その後，国分寺での巡検だったと記憶していますが，先生が地理学のロマンについて熱く語っていらしたことが印象に残り，次

第に地理学に興味を持つようになりました．先生のお話の面白さもさることながら，ワインが好きで丸眼鏡をかけ懐中時計を愛用しているというお洒落な雰囲気と，何事も学生の目線で一緒に楽しんでくださる親しみやすいお人柄は，私のみならず全ての学生から人気を集めていたように思います．

欧米研究御用達のウシカミという，今はなくなってしまった国分寺のワイン酒場で，とりとめのない話をするのは，ワインに酔っていたからか，地理学のロマンに酔っていたからか，今となっては分かりませんが，とても居心地のよい時間だったことを覚えています．もちろんワインを抜きにしても，先生の授業やゼミ，巡検はいつも興味深く楽しいものでした．サブゼミと称して，学科や大学の垣根を越えて指導されている姿も印象的でした．音楽科や多言語多文化の先輩方と，ハンガリーの伝統楽器「テケルー」を囲んでその音色を聞くなど，さまざまな集まりに混ぜていただき，貴重な経験をすることができました．

ヨーロッパ地域ゼミのメンバーは皆が自由奔放で，単位は取れるか？卒業論文は書けるか？就職はできるか？と全方面で先生を心配させていました．かくいう私もその一人で，先生は道に迷える私のために，お忙しいなか時間を作って，何度も話を聞いてくださいました．話が尽きないので，しまいにはワインが出てくることもあったように思います．そんな時間を繰り返すうちに，卒業に向けて少しずつ道が見えてきたものでした．それからの私は，興味のないことには目もくれず，やりたいことを納得のいくまでやる我が儘っぷりでしたが，そんな私を先生は理解してくださり，在学中はのびのびと過ごすことができました．

卒業論文では，昭和初期における横浜の観光空間について研究することになり，これも何かと迷走しがちな私の話を何度でも聞いてくださり，地理学とは何か，地理学をやる意義とは何かを先生が熱心に説いてくださったおかげで，興味がぶれることなく書き上げることができました．就職でも先生にはご心配をおかけしましたが，鉄道会社への就職が決まった時，誰よりも喜んでくださいました．地理学的なものの見方は仕事の役に立っていますし，私自身のバックグラウンドとして誇りに思っています．先生と過ごした時間がなければ，今の私はいなかったでしょう．今でも苦しい時には，よく当時のことを反芻して心の支えにしており，いくら感謝しても感謝しきれません．本当にありがとうございました．

2014年5月　東京都心巡検にて

卒業してからも先生との交流は続いており，先生が主催されている野外見聞会には，いつも楽しく参加させていただいています．先生がお話されている時の楽しそうな表情を見ると，学生時代に戻ったような気持ちになるとともに，あの頃の将来に対して前向きな気持ちを思い出し，また頑張ろうというエネルギーが湧いてきます．これからもさまざまな場所をご一緒させていただき，ワインを片手に，楽しくご機嫌に話ができることを心待ちにしています．加賀美先生，改めましてご定年おめでとうございます．今後益々のご活躍をお祈り申し上げます．

加賀美先生とヨーロッパ地誌との出会い

2017年修了　木戸　泉

はじめて加賀美先生の講義に出席したのは学部3年のことでした．ドイツ留学から戻り，今後バルカン地域の研究を続けようか悩んでいた時に，知り合いに加賀美先生が持たれていた地誌学の授業を勧めてもらったのです．当時先生は学芸大学から離れた池袋の大学で地理の授業を担当されており，そこで勧められるがままに地誌学の授業を受けた私は，すっかり地理学，ヨーロッパの地誌学という学問の面白さにハマってしまいました．これも先生のアプローチが面白かったからなのですが，今まで歴史資料だけで地域の現象を見ていた私には非常に新鮮でした．そして，資料だけでなく，現地に行って観察し，話を聞き，地べたで感じ考える学問が私には向いていると思ったのです．先生の講義の時には，大きな講義室の前の方の席に座り，講義の後は質問をしに教壇まで行ったのが懐かしいです．それから，数年間加賀美先生には非常にお世話になることとなりました．

まだ学芸大に行く前でしたが，先生にお声がけいただきヨーロッパ巡検にも参加させていただきました．ヨーロッパの街を一人で歩く時には気づかなかった視点を，先生や地域研究ゼミの皆さんと現地を歩いて学ぶことができました．ウィーンをはじめ，さまざまな街を巡りましたが，やはり皆さんと訪れたアウシュヴィッツは忘れることはできません．未来に繋ぐために記憶の継承はどのように変容するのか，帰りの列車でひたすら考え込んでいました．今書きながら気づいたのですが，その視点が大学院での研究の根底になったように思います．あの時は本当に貴重な機会をいただきました．地元のレストランで毎晩反省会（？）をやったのもいい思い出です．

そして，ただ先生のもとで学んでみたいという思いで大学院に進学しました．面白いこと，疑問に思ったことをずっと考えられる，本当に楽しく贅沢な時間でした．自分の研究については迷走することもありましたが，厳しくも優しいご指導でなんとか形にすることができました．先生のもとで学ぶ院生は私だけでしたが，学部のゼミ生さんたちを誘って映画観賞会を開催させていただいたりと（その時先生はブドウの飲み物を皆に振る舞われておりましたね），好きなことをさせていただいたなと思います．修了後も何かとお声がけいただき，先生のご指導と励ましによって修士論文の体裁を整えてE-journal GEO に掲載することができました．自分の研究がこれで世に残ると思った時はとても感慨深かったです．

院生の時，好奇心を持って世界をまなざす先生の姿勢を間近で拝見しました．若い頃に抱いた関心を，ヨーロッパの地域を舞台に長い時間をかけて明らかにされてきた先生のもとで2年間じっくり学べたことは，私の人生の糧になりました．社会に出てからも，あの2年間で学んだ姿勢は常に心がけています．現場に足を運んでそこで考える，さまざまなデータを揃えてその地域を総合的に考える，そのような地誌学的な視点は今の仕事でも大切にしています．その中でも一番は大切にしているのは，そこに暮らす人たちのことを考える，ということです．

現在は残念ながら，海外へ自由に調査に行くことがままなりません．しかし，未来はより良くなります．そうしたら，何か面白いことをしましょう．私ももっと勉強しておきます．

ご退職後も学芸大にいらっしゃるとのこと，これからもヨーロッパ地誌の面白さを若者に伝えていってください．きっと先生の講義でヨーロッパの見方が変わる学生さんが増えていくと思います．研究以外のことでもご多忙だったようですが，ご退職後は先生のペースで，末長く

研究に専念できることを切に願っております．

人生を変えた中央ヨーロッパ巡検

2016 年卒業　2019 年修了　嶋田真美

学生時代の忘れられない思い出の一つに，2014 年に行われた中央ヨーロッパ巡検があります．この巡検はその後の私の人生に大きな影響を与えることになるのですが，今回はこの巡検を中心に，加賀美先生との思い出を振り返りたいと思います．

この巡検は，アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所訪問を主目的に，所属のバラバラな学生十数名と先生でウィーン・クラクフ・ブラチスラバ等をめぐるものでした．それまでの授業やゼミでは加賀美先生の視点から見た，アウシュヴィッツやヨーロッパの移民街，そして現地の盛り場についての興味深い話を沢山聞いていました．それを現地で見て回る機会を作ってくださるということで，こんな貴重な旅はないと数か月前から学習会を行い，期待に胸を膨らませて出発．ウィーンに現地集合という，学生にとっては難易度の高い旅の始まりでした．ウィーンでは，数々の歴史的建造物はもちろん，移民街やユダヤ人墓地などを見て回り，旅のメインであるアウシュヴィッツでは，あまりに観光地化が進む様子に驚きつつも，歴史の重みを体感しました．

2014年9月　ポーランド・クラクフにて．
シナゴーグ（ユダヤ教会堂）に入るため，
頭にキッパーを乗せている

巡検時の加賀美先生のパワーは物凄く，学生たちを軒並み置いて行ってしまいそうなスピードで歩かれます．しかし，地形や建物，道行く人に目を留めてはその知識と観察眼を駆使し，本を読むだけではわからない現実を教えてくれました．学生からの質問には，トレードマークの丸眼鏡をキラリと光らせるように「いい質問ですねえ」と答えてくれ，先生を唸らせる質問ができはしないかと私たちも一生懸命観察しながら歩いたものです．先生と一緒に街を歩くと単なる路地などなく，すべてが地域を構成する一部のように思えました．

先生のお茶目な一面も垣間見えました．ヨーロッパ地誌ゼミでは，巡検後には必ず先生のお墨付きのお店で打ち上げを行います．巡検そのもの以上にこれを楽しみにしている先生を見た方も多いでしょう．この時は中日にウィーンのプラーターで巨大なビールジョッキと共に打ち上げたのですが，名物の巨大なシュニッツェルにフォークとナイフで嬉しそうに立ち向かう先生はとびきりのお茶目な笑顔で，皆大いに盛り上がりました．先生は学生の前ではいつもスマートな印象でしたから，この時に撮った写真は参加者一同宝物にしています．

冒頭で触れたように，この巡検は私の人生をも変えてしまいました．クラクフの街並みの美しさに感動した私は，3 年後の大学院在籍時にポーランドに留学することを決めます．留学のきっかけはこの巡検であり，迷う私に「嶋田さん，行っちゃえばいいじゃない！」と最後の一押しをくれたのも加賀美先生でした．この留学経験は，現在中高一貫校で地理教員として働く私の大きな力となっています．

加賀美先生には学部と大学院の計 7 年間お世話になりました．諸先輩方がそうであったよう

に，このご恩は計り知れません．本当に感謝しております．恩返しになればと，今は中高生に地理の面白さを伝えるべく試行錯誤の毎日で，ふとしたときに思い出す先生の言葉を，引用符なしに我が物顔で使っています．どうぞお許しくだされば幸いです．加賀美先生，ご退職おめでとうございます．

「私にとっての加賀美先生」の年齢を超えて

1997年修了（院29期）　山元貴継

加賀美先生のもとで，学部の4年間，さらには大学院を含めてもっと長い年月指導を受けられた皆様もいらっしゃる中で，自身の修士課程の間しかない先生の思い出を語る失礼をお許し下さい．学芸大の地理学教室を修了して25年，私は現在，とある大学に勤務しており，そこではすっかり，「文章添削にうるさい先生」のイメージを持たれています．そして，教員に加えて研究者になっている教え子もちらほらいる中で，そうした教え子を連れて向かった学会の懇親会などで加賀美先生をお見かけした際に，「私（山元）もかつてはあちらの先生に，論文の添削などで迷惑をおかけしてたんだよ」と教え子に伝えると，「（山元）先生の文章を添削！？」と驚かれるのが，もはやお約束となっています．そうした立場ならではの，先生のご専門と全く無関係にて恐縮ながらの加賀美先生の思い出があります．

思い出は美化されていると思いつつ，当時の加賀美先生は若々しく，また，「いやあ，君の研究のことはさっぱり分からないんだけどね」とおっしゃりつつも，こちらが論文の草稿など手に持っていようものなら，「見てみようか？」と颯爽と手に取られるというイメージです．そして私には，すぐに細部まで目を通された添削を返していただいた上に，「君ねぇ，文章は悪くないんだが『がちょん（…であるが，…）』が多過ぎるよ」とズバリご指摘をという，強烈な思い出が残ります．当時の自身の，拙い研究視点のあらだけでなく，それまで意識していなかったいろいろな文章の癖を指摘いただいた加賀美先生の言葉が，今でもまとまった文章を書くたびに，そして学生の文章を添削するたびに，頭に浮かびます．

そして，自身が当時の加賀美先生のご年齢を超えた中で，そうした指導にはけっこう体力が必要で，いつまでもできるものではないとも感じています．加賀美先生にはその後も，地理学教室だけでなく学会で活躍されたお姿があると存じながらも，20年以上前，青木栄一先生や斎藤毅先生を筆頭とする教室の堂々たる先生方の中で，当時椿先生に次ぐ若手であった加賀美先生の，もしかしたら研究だけでなく指導の方向性を大きく模索されているまっただ中の良いところで私たちは指導を受けられたのでないかと，同期でやはり大学教員となった大石太郎氏と話すたびに，いつも意見が合います．

その加賀美先生が定年退職されるとのことで，年月が経つ早さを感じます．長年教室で，どれだけ多くの学生を育てられたのであろうと，同じく大学教員となった身として，ただただ尊敬しかありません．本当にお疲れ様でした．そしてこの文章も，できるだけ逆接の接続詞は使わないようにしました「が，」これで大丈夫でしょうか？ 相変わらず，一文が長くてすみません．